

妖怪によって様々だが、私の場合、決まった場所に居を構えているわけではない。よくニューズなどで耳にする「住所不定」という状況。睡眠を取らなくても平気な私には寢床を確保する必要はない、という事だ。

とはいえ、私にも一応帰る場所はある。帰ると言うよりは時折立ち寄ると言った方が正しいか。本来ここへ戻る必要もなければ、勝手に「自称保護者」が私の仮住居と決めたことなんだし。

「お、帰ってたか」

その保護者が、テラスにある白い椅子に腰掛けお茶を嗜たしなんでいる私に話しかけてきた。こちらの許可も求めずコイツは、テーブルを挟んだ向かい側の椅子に腰掛けた。縦にも大きい横にも大きいこの男が座ること、白く可愛らしい椅子が軽く悲鳴を上げた。

「別に悪さはしてないわよ。今のところはね」

訊かれる前に自分から答える。コイツは保護者というより監視員に近い。だからいつでも、私が何か悪さをしていないかと目を光らせている。私が日本にやってきたのをどうやって知ったのか、来てほんの数日後にはこいつから接触してきたほどで……その時に私の保護を申し出、人間社会での生活をサポートすること、その為に自分の屋敷を拠点にして良い等と一方的に約束してきた。その代わり、人間を殺したり……私の場合好物である脳髓を啜るなどの行為を勝手に禁止してきた。最初こそ当然反発したが、コイツの粘り強い説得がうざくなり、結局は私の方から折れる形になってしまったが……ホントうざいけど、コイツのおかげでこの日本で生活していくのがずいぶんと楽になったのも事実。それがとつても癪しゃくなんだけどね。

「その事は心配してないさ。君はとつても良い子だからね」

気持ち悪い。膨らんだ顔を更に笑顔で膨らませている。こんな成りでも、国内はもとより世界各地の妖怪や妖精などの「人外」の者達に慕われているというのだから……その事実が更に気持ち悪いわ。

「はいはい、流石は学者先生ですこと。なんでもお見通しで」

私はイヤミたっぷり言い放ち、両膝をテーブルに付きながらティーカップを口元に運ぶ。

「先生はよしてくれと言ってるだろ、克蘭。俺は妖精フェアリドクター学者であつて、先生と呼ばれるほど偉くはないよ」

毎回言われる嫌みに、学者先生は眉をひそめながら抗議する。私はその困り顔を見ながら口元をつり上げた。

今彼が私を呼んだ名前、克蘭。一応私はこの名で通しているが、本名ではない。というより、私に名前なんか無い。社会にとけ込んで生活していく上で名無しのままでは不便だからと、この男が勝手に付けた名前なのだが……なんでも、チンギスハーンの物語に登場する女性の名前なんだとか。私がモンゴル出身だからということひねり出した名前らしい。

「でもドクターってこの国では先生なんでしょ？」

「英語と日本語の解釈が違うだけだ」

何度も繰り返す説明にうんざりしている様子。そもそも妖精学者フェアリドクターという職種自体この国では彼しかいないし、本場イギリスでも表向きの妖精学者フェアリドクターと裏で活躍する妖精学者フェアリドクターではずいぶんと活動内容が違うし。だからコイツは色んな人や妖怪、妖精達に始めて合う度手慣れた様子で自分の事を話すのだが……私のように、判っていて何度も尋ねられればうんざりもする。まあ、私達にとってはもう挨拶のようなものか。

「で……仕事の方は順調か？ 店長からは良くやってくれていると聞いてるけど」

「まーねー。でもさ、時々職務質問みたいなのがウザイのよね。警察官とかじゃなくても、大丈夫なのとか言ってくる一般客も多いし」

見た目が完全に子供な私が働いている姿を見れば、誰だって疑問に感じて当然だろう。

職場が職場だけに。むしろ誰も疑問に感じなかったら、それはそれで社会的に問題だ。

「さてと……そろそろ、そのお仕事の時間だわ。行ってくる」

「あーいよ、気をつけてな」

大人用の椅子から軽く飛び降り、私は手を振って屋敷から離れていく。そして私は姿を鳥に変え、翼を大きく羽ばたかせ飛び立った。

本来私に、お金は必要ない。だから働く必要もない。それでも働いているのは、それなりの理由があるからだ。

「はい、「愛情卵でふんわり包んだオムライス」ね」

恥ずかしいネーミングを慣れた口調で言いながら、私はそのネーミングにはそぐわない無愛想な態度でオムライスをテーブルの上に置く。それにしても、この名前はどうかにならないものか……まあ、この店が店だけに、むしろこの手の名前でなければならぬのは判っているんだけど。

私が働いているのは、俗に「メイド喫茶」と呼ばれるような店。ただ店員の衣装はメイド服とは限らず、繁盛している店のように過剰なサービスなどは行っていない。実際私が着ているのは着慣れたゴスロリだし、態度もメイドっぽくはない。それでも……まあ、自分で言うのもなんだけど……店員として人気があるらしいのだから、おかしなものだ。ホント、男どもの言う「萌え」のポイントとやらは千差万別だ。

「ありがとー、クランちゃん」

客が愛想良く笑いかける。私はその笑顔に答えるわけでもなく、そそくさと次の料理を運ぶために厨房へと戻る。こんな態度でも客は勝手に私のことを「ツンデレ」とか言う奴に脳内変換して喜び、私としてもこれでウエイトレスとして成立するのだから……私にとつて本当に、楽な仕事だ。むしろ、楽だからこの仕事をしているわけではなく、今の客のように、私のこの容姿と態度を好むという「需要」があるから、店長が私を雇い「供給」しているに過ぎない。それに私がここで働くのはもっと別の、「もう一つの仕事」があるからだし。

「これ、12番テーブルね。それと……「いつもの」お客さんだから」

厨房で待っていたメイド服のホール長が、私に料理と、そして折りたたまれたカードを手渡す。私はトレイを持ちながらカードの中身を確認し、思わず苦笑してしまった。

「アイツか……店には毎日顔を出してるが、「これ」は久しぶりだな」

カードをヒラヒラと振りながら、ホール長にむけて私はまた苦笑い。

「大切な常連さんなんだから、優しくしてあげてね」

「優しくしたら喜ばないよ、アレは」

私の言葉に、今度はホール長が苦笑いを浮かべる。一応ホール長も、アレの「性癖」は今私が持っているカードを見て知っているから。

私はカードをトレイに載せられた料理の下に敷き、指定された12番テーブルへ向かった。「ほれ」

私は「身体まで熱くなっちゃう萌え萌えカレー」という長つたらしい料理名を口にしないまま、テーブルの上へやはり無愛想に置いた。見慣れた客は私を見て、そして料理の下に敷かれたカードを見て、再び私を見つめながら気持ち悪い笑顔を浮かべる。

「いつもありがとう、クランたん」

「なれなれしく「たん」とか呼ばないで」

彼が言った礼は、ウエイトレスである私に向けられたものではなく、もう一つの「仕事」を私が受けたことに対するもの。このことを理解しているのは、この気持ち悪い客と私だけ。周囲にいる「普通の」客には、なんでもないこの店ならではのコミュニケーションに見えているはずだ。

「いつも通りで良いわね？」

コクコクと首を振る常連客。それを見届け、私はウエイトレスとしての仕事を続けるためにまた厨房へと戻っていった。

夜……私はラブホテルの一室にいる。店に来ていた常連客と共に。

あのカードは要するに、このもう一つの仕事……売春のやり取りをする時に用いるカード。私が働いているメイド喫茶は、売春の斡旋あせんも行っているわけだ。とはいえ、むろん普通の売春ではない。あの店、実は店員のほとんどが人間ではなく、様々な人外種族が働いている。そしてウエイトレスのほとんどが私のように夜の客もあの店で取っている。

私にお金はないが、糧として男の精気が必要になる。昨夜のように街を徘徊し餌となる男を捕食する方法もあるが、あまり頻繁に続けると警察などの目が厳しくなる。そこで私は、安全に餌を確保する手段としてあの店で働き、こうして客を取ってその客から糧を得ている。店としても儲かるし、客としても人間相手では得ることの出来ない快楽を得られるのだから、誰にとつても得なことばかり。私達は人間じゃないから「罪」にはならないしね。

ウエイトレスの中には私と同様精気を求める淫魔も多いが、血を求める吸血鬼も多い。そして客は、私達が人間ではないことを知っている。あの学者先生が言うところの、貴重な「協力者」という事になる。そんな彼らがどうやって私達の存在を知ったのかは人によってまちまちらしいが……まあ私に言わせれば、「ここまでたどり着けたほど欲深い」「変態」って事になるかな。事実今日の客だつて、元々は私に狩られた、ただのロリコンだった訳だし。アレにしてみれば、私が妖怪かどうかより自分好みの女を抱けるかどうかの方が重要で……あー、アイツの場合「抱く」って意識はないかもしれない。

「で、一号。今日は何を着て欲しいわけ？」

私はコイツを普段「一号」と呼んでいる。もっと正確に言えば奴隷一号。まあ、意味はその言葉通りだ。こう呼ばれること自体が既にプレイであり、すなわちこれは本人の希望でもある。

私の問いかけに、一号は持参した紙袋を手渡してきた。それを受け取り、私は中身をその紙袋から取り出す。

「ふーん、なるほど……今日はこれね」

一号がしきりに頷いている。私が手にしているのは、子供サイズの衣装。たしか、日曜の朝に放送されているアニメのキャラクターが着ているのと同じかな。詳しくは知らないけど、見覚えはあった。サイズは、私にはちょっと大きめか。しかし着られないサイズではない。

「相変わらず良い趣味してるわね、この変態ロリコンが」

侮辱の言葉が男の頬を軽く赤らめる。むろん怒っているのではない。この奴隷一号は興奮し始めている。

「さ、アンタは服を脱いだら正座して待つてな」

私は衣装を手に、風呂場へと向かった。一度シャワーを浴びてからこの衣装に着替えるために。目の前で着替えるところを見せてやっても良いけど、今日は昼間の仕事で汗を掻いたからちゃんとその汗を流したかった。むろんこの男ならそんな汗臭い私で興奮するのだろうか、そんなサービスマまで今日してやることはない。

「はっ、はい、女王たん……」

なんなんだろうね、この「たん」ってのは。それも女王たんって……何故かこの名称が私の奴隷達には受けが良い。あまり気持ちの良い呼ばれ方ではないが、これくらい好きにさせてやるのも客へのサービスかな。

脱衣場から戻ると、一号は言われたとおり全裸のまま正座して待つていた。

「ほら、着てやったわよ。どう？」

私はくるりと、その場で回って見せてやった。ワンピースの裾が、ふわりと浮く。私の生足と、そして何も履いていないお尻が、男の目に飛び込んだらう。そう、私は衣装の下に下着は着ていない。これからどうせ脱ぐのだから、この方が面倒が無くて良い。もちろん、この方がコイツを興奮させるだろうというのもある。サービスという意味もあるが、相手を興奮させた方がより良い精気を吸えるのでその為ね。

「……なに早速起たせてるのよ。相変わらずみっともないわね」

正座しているからこそよく判る。男は己の肉棒をもう熱り起たせていた。

「起つてるわりに、ちよつと小さいんじゃない？」

私は衣装に入っていた靴を履いたまま、熱り起った男の棒を踏みつける。

「いぎっしー！」

完全に力を入れて踏んでいるわけではないが、靴を履いたままで、しかも元が小さめとはいえ膨張しているところを踏まれれば、軽く悲鳴を上げたくもなるだろう。

「ふーん……痛いのか？ それとも……気持ちいいの？」

男は何も答えない。ただ赤い顔のまま荒く呼吸をするだけ。それはもう、恍惚の表情と

言って良さそうだ。私はこのまま軽く足を動かす。すると足下の肉が靴越しにでも判るほどビクリと痙攣する。顔はもちろんよりだらしなくなり、口は半開きになっている。それを見て私は口元をつり上げ、足を動かし続けた。

「こんな女の子を買ってホテルに連れ込んで、あげく足で逝かされちゃうんだ。ねえ、情けないと思わないの？」

男は答えない。ただ侮辱の言葉を受け、その言葉に酔いしれるだけ。本人はこれで良いのかもしれないが、質問に答えないその態度は気に入らない。

「答えなさいよ！」

ぐつと、足に力を入れ踏み込む。その時だった。

「ぐっ！」

男の短いうめき声と共に、白濁した液が男の腹にねっとり飛び散った。

「あはははは、こんなで逝っちゃったの？ いつもながら変態だね、あんたは」

罵倒されながら、男は目に涙を溜めている。むしろ悔しさからではなく……いや、悔しさも多少あるのだろう。むしろそれを感じるからこそその恥辱プレイなのだから。

「ねえ、まだ逝きたい？」

正座した男は、僅かに顔を上げる。恍惚な表情を浮かべるその顔はもちろん、もっと続けて欲しいと懇願こんがんしている。しかし言葉にしなければ意味がない。言葉にしてこそそこに恥辱が生まれ、興奮できるのだから。口元を歪め、私は再度一号に尋ねる。

「どうなの？ これで満足なら止めるわよ？」

男にとっての理想が、今目の前にいる。屈辱的な言葉を投げかける、魅惑的な少女が。そんな少女が自分好みのコスプレまでして自分の肉棒を踏んづたまま尋ねているのだ。答えはもう決まっているも同然。

「……まだ、逝きたいです。女王さんに、何度でも逝かせて欲しいです」

涙目のまま懇願する奴隷。その返答に満足した私は肉棒から足をどけ、次の命令を下す。

「そう……なら、あの鏡に向かって四つんばいになりなさい」

部屋に置かれていた姿見に向かって四つんばいさせ、私は男の後ろに回り靴を脱いだ。

「ほら、存分に感じなさい」

私は足のかかとを、男の尻にグリグリと押しつけた。

「うぐっ」

短い悲鳴は、すぐに荒い息へと変わる。男は正面を見た。そこには、アニメキャラの衣装を着た少女に、尻を踏まれ喘いでいる自分の姿。

「こんなでも興奮できるなんて、やっぱり変態よね」

罵倒される快樂に息が荒くなる男は、じっと鏡越しに私を見つめ、更に息を荒げていく。

「あなたが変態なら、そのまま自分のをしごいてみなさいよ」

私からの素敵なアドバイスに、男はゆっくりと従った。片手で身体を支え、片手で自分の肉棒を掴み、そしてゆっくり前後に動かしている。

「あはは、変態って認めたのね。ねえ、変態なら「僕は変態です」ってちゃんと言ってみてよ」

男は頭を下げしばし黙っていたが、やがて口を開いた。

「僕は……変態……です」

言ったきり、男は尻を踏まれる感触を楽しみながら自慰に没頭した。恥ずかしさから顔を下げたまま、その辱め<sup>はずかし</sup>に自身を集中させ興奮を得ている。

「よく言えたわね。折角だから、ご褒美を見せてあげろ。さ、前を向きな」

男が顔を上げ、再び姿見を見る。そこには、スカートの裾をまくり上げ、股間を露わにしながら男の尻を踏み続けている私の姿が。

「どう？」

返ってくる答えを知らながら、私は尋ねた。

「萌え……女王さん、萌えます。とても可愛い……素敵です」

少ないボキヤブラリーなりに、私を褒めちぎる。もうちょっと別の言葉、別の褒めようもあると思うが、まあこの男ならこんなものか。

「当然ね。さあいいわよ、それだけ素敵な私を見ながら、また逝っちゃいなさいよ」

グイッと、足に力を入れる。男はより激しく手を動かしている。ハアハアと荒くなる男の息。そして僅かに、私の息も荒くなってきた。

「本当に無様な格好。これで人間だって言うんだから……アンタなんか豚で充分よね」

手の動きが速くなる。私も足に入れる力を増してあげた。そろそろ、コイツは逝くだろう。

「うっ……」

案の定、短い声と共に白濁液が男の真下へ飛び散り、敷かれたカーペットが汚されていた。案の定、本当に逝っちゃったのね。さすがはへ・ン・タ・イ

男は肉棒から手を放し、両手で床に手を付く。言葉は耳に届いているだろうが、男は荒い息を整えるのに必至で返答が出来ない。

「ばさつとしてないの！」

私は強く尻を横から蹴り、男を仰向けに寝転がせる。

「ほら……いよいよお待ちかねのこれよ」

私は男の顔をまたぎ、先ほどまで鏡越しで凝視させていた私の秘所を眼前に見せつけた。

「舐めなさい」

私の命令に従い、男は私の秘所へ舌を必至になって伸ばす。ピチャピチャと、軽い音が微かに聞こえる。もう何度も舐めさせてきたが、未だにどこかきこちなく、舌の動きがもどかしい。

「……まったく、相変わらず下手くそだね」

こう侮辱されたいが為に技術の向上をさせないでいるのだろうか。ま、本当に不器用なだけというのが真相だろうけど。このままでは時間がいくらあっても快樂にまで到達しそうにないが、私は続けさせた。この後の下準備のためと、奴隷をより興奮させるために。

「あら、もうずいぶんと起たせてるのね。流石変態。二回も逝つといて、さっきまでより大きくなってらんじゃない？」

後ろにのけぞり手で触れてみると、ビクリと軽く跳ねた。二度も逝ったばかりで敏感になっっているのだろう。だが二度も逝ってるからこそ、そう簡単に三度目はないだろう。

私は腰を上げた。一号の舌が名残惜しそうにまだ天に向け伸びていたが、それに構わず私はそのまま後ずさり、しっかりと肉棒を掴みながらその上に腰を持って行く。

「さ、よく見なさい。入れるわよ」

男のそれを自分であてがい、私は一気に腰を落とす。

「んっ！」

「くっ！」

思った通り、流石にここで三度目へと達する事はなかった。以前は入れただけで逝くこともあったくらいだから、ちよつとは持つようになったかな？ しかし男の肉棒はビクビクと私の中で脈打ち、すぐにでもまた出してしまいそうな雰囲気はある。

「ちよつとはもたせてよね……ん、あ、うふっ……んん」

言いながら激しく腰を動かす私。保てとは言ったけど、その事に気を遣うつもりはない。なにせ二度も逝かせて……そこから私は本来の目的である精気を吸い取れなかったのだから、この三度目でたっぷりと貰わないと釣りが合わないし。

「ちよつ……胸ぐらい、揉みなさいよ……ほら！」

なすがまま寝そべっているマグロ。私はマグロの手をとり、自分から胸にあてがった。

言われてやつと、男はぎこちなく手を動かしてきた。そして興奮からか、やつと腰もこちらに合わせ動かすようになった。

「そう、よ。これくらい、言われないでも、ん、しなさい、よ……あっ、ん……」

まったく、立場上コイツは確かに客なんだけど、お客様気分なのかされるがままでいれるのは困るのよね。自ら奴隷一号を名乗ってるんだから、ちよつとはご主人様を気持ちよくしてやろうって気遣いがないのかしら、コイツは。ああ、もしかしたら積極的になる私を楽しんでいるのかな？ だとすれば……店でも常連としてみられているだけはあるって事かな。まったく、生意気ね。

胸のブローチが邪魔なこともあって、衣装越しでは胸は揉みにくそうだ。それでも何もされないよりはまし。私はとにかく、ここで少しでも「成果」が欲しいと焦った。快楽を与えるだけで、快楽を得られないのはあまりにも理不尽。腰を振り、私は貪欲に快楽を求めた。それがコイツの思う壺だったとしても、もうどうでもいいわ。そんな事にまでいちプライドを張っていられないし、何より、私も気持ちよくなりたかった。

「ほら、もっと……ね、もっと、突き上げなさい、よ……ほら、もう少し、だから……」

このままでは、男の方が早いだろうか？ 焦った私は、とっとう片手で自分の胸を揉み、そして残った手で自分の陰核をまさぐり始めた。

「あ、いい、やっぱり、自分でした方が……いい、ああ、あんたも、もっと、あっ、んん！」

これでは自慰と変わらないのでは？ ふとそんな事も思ったが、快楽を求める私にそんな事はどうでもよくなっていた。

「どう、気持ちいいの？ いって、ごらんな、さいよ……」

「はい、きもち、いい、です……女王、たん、女王、たん……きもち、いい、きもち、いいです……」

途切れ途切れに喘ぎながら言葉を絞り出す奴隷。これでこの男にかわいげがあればその声がかんフル剤になることもあるのだろうけど、コイツではそこまで望めないわね。私は男が誰であれどうであれ、ここまで肉棒を熱く起たせているという事実自ら興奮し、乳首と陰核をコリコリといじり続ける。

「女王たん……そろそろ……」

「ダメよ！　ここで逝ったら二度と入れさせてやらないんだから！」

何度逝こうが構わないけど、ようやく私も「頂点」に上り詰めそうなのだから……「こ」でコイツが逝って入れている肉棒が柔らかくなったら、「こ」ちが逝くのをじらされてしまう。この堅さはキープして貰わなくては困る。私は陰核をいじるのを止め、その手で肉棒の根本をぐつと掴んで堪えさせた。

「がんばり、なさいよ……もう少し、もう少し、だから……」

より激しく腰を振る私。掴んでいる肉棒がはち切れそうなほど膨張している。小さな私の手ではぐつと握るのも困難なほどになっているが、コイツの肉棒は元が小さいからまだ私の手でもどうにかなっている。まあ、よく考えれば元が小さいから私がここまで逝くのに苦労させられているとも言えるんだけど。

「もう少し、いいわ、そのまま、ん、あつ、そろそろ、あつ、ああん、はっ、いい、いい、んっ！」

ビクビクと私の身体が小刻みに震える。それと同時に手を放し肉棒を解放してやると、勢いよく私の中へ奴隷の精子と精気が流れ込んでくる。二度目だというのにたいした量だ。膣の奥でその量を感じた時、私はやつと「成果」を得た。

「はあ、はあ……まったく、三度目なのにまだこんなに出るなんて。流石変態ね」

量の多さは私にとつてありがたいことだから、私はコイツが喜ぶよう言葉を選び褒めてやった。むろん一号は嬉しそうに汚らしく笑顔を作っている。

「でもさ……ちよつと下手すぎるのよ」

この言葉も当然侮辱の一種だが、しかしこればかりはこの男も本気でへこんでいる様子。快樂のために発している侮蔑ぶべつの言葉ではなく、私の本音なのだからここでへこんでくれなくて困るのだが。まあ客に対して「下手くそ」などと本気で言うのはどうなのかとも思うが……そもそも私に、そしてコイツにも、「客」という意識はほとんど無い。それぞれがより楽しめるように、もうちよつと改善を試みる必要があるのかも。

「ほら、アンタが汚したんだから、アンタが綺麗にしなさいよ。もちろん自分の舌でね」  
私はベッドに腰掛け、股を大きく開いて男に見せる。男は当然また興奮し始めるのだが、私が欲しいのは四発目ではなかった。

「ついでに、私を気持ちよくしてご覧なさい」

そういえば、私はコイツの女王として「育成」をしてこなかったな。奴隷を奴隷らしく調教するのも女王様の務めかな。やはりぎこちない舌使いのコイツを、私は侮蔑の言葉で丁寧に指導してやった。